冬の室内遊びについて

三国洋子

函館市は北海道の最南端ですが、それでも十一月になるともう雪が降りはじめますし、三・四月は雪融けで戸外遊びがほとんど出来ない状態です。冬期間を通じて雪遊びが出来るのは、一・二月の雪晴れの日だけに限られてしまいます。こうした地域性から、必然的に室内遊びが重視されてまいります。

音を立てて燃えるストーヴを囲みながら、楽しい室内遊びに刻の移るのを忘れる子どもたち。窓外の吹雪をよそに、子どもたちは明るく話し合い、歌って笑って、春の芽吹きを待ちわびます。

北海道人の忍耐強さがよく言われますけれど、子どもたちの生活の中にも早くから培われることなのかもしれません。

室内遊びと言っても、さまざまありましょう。保育内容によって次のように分類することも考えられます。言語を主としたもの、社会を主としたもの、音楽・リズムを主としたもの、健康を主としたもの、絵画を主としたものなどです。他に伝承あそびのようなものも数えられるでしょう。

私どもの園では、第三期は園生活の総仕上げと考えておりますので、保育全般を綜合的なもの、協同的なものへ高めていくようにしております。室内遊びもその意味で選択、工夫しておりますが、その中からいくつかをとり上げてみましょう。

とくに目新しいものはありませんが、幾分でも参考になれば幸です。

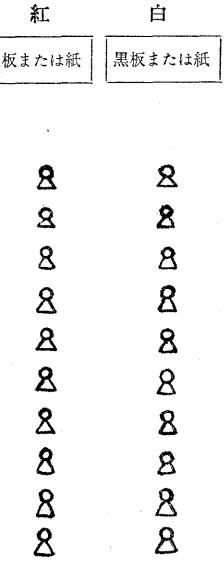
①お話作り

これは全員で一つのお話を作る遊びです。はじめ先生がきっかけを作ってひとりの子どもに渡すと、次々にお話を作り足していきます。どの子も楽しく参加出来るよう短かい一節でも大切に取りあげる空気が大切です。慣れてしまうと、きっかけを渡す必要もなく、子どもたちの手でスムースにお話が進展していきます。思いがけない筋の発展に、子どもたちは期待し、想像し、手を拍って大喜びです。年長組の場合はさらに発展して、全員の手で紙芝居作りとなり、微笑ましい上演にまでなること

も多いようです。
昨年はクリスマスや豆まき、ひなまつりのときなどに面白いお話や紙芝居が出来、お母様がたに発表して喜んでいただきました。生活感情の豊かさや、表現能力を培うためにも楽しい遊びの一つにしております。

②絵かきあそび

これは紅白対抗のあそびです。
黒板やチョーク（大判の紙とマジックインキでもよいでしょう）を用意します。
次に図のように子どもたちを坐らせます。（やり方によっては子どもたちの普段の座席のままでも出来ます）



はじめにテーマを決めます。
例えば「街の中」「動物園」のように。紅白二組から一人ずつ、順に黒板（又は紙）へ行ってひとつだけ絵をかいてきます。順に全員が描き終るまで続けます。人数の少ないときは大きな一つの絵を部分部分だけ描いていって完成させる方法もありますが、「街の中」のように、自動車を描いてくる子、人を描いてくる子、家を描いてくる子、なかには電車のレールだけ描いてくる子、と思い思いの方が面白く、子どもたちも楽しんでします。早く描き終った方が勝というばかりではなく、出来上った絵の評価も全員でするようにしたらよいと思います。
急いで乱暴にならないよう、走らないで行くよう注意させましょう。
チョーク（またはマジックインキ）はバトン代りにします。

③汽車鬼

これもよくやる遊びだと思いますが、遊戯室で元気一ぱい走り廻るのにはよい遊びです。
はじめ五人一組で汽車になります。
先頭の子が機関車です。ピアノが鳴っている間は走り、止むと停止してしゃがむことを、あらかじめ約束しておきます。
汽車はピアノの曲に合せて、各々注意の方向に向って走りますが、このとき、他の汽車とぶつかったら、停って機関車同志ジャンケンをするのです。負けた方の機関車は勝った方の汽車の一番背後につきます。そうしてまたすぐ走り出すのです。幾度か繰り返すうちに長い汽車と、短い汽車が出来ます。中には消えてしまうのもあるかもしれません。
非常に喜び、歓声を挙げてぶつかりたがりますので、乱暴にぶつからないよう、よく注意させることが必要です。
適当なときに休ませて、全員で数を数えたり、比較させてみま

しょう。

④遊具を使用した遊び

これも遊ぎ室でする遊びです。

遊ぎ室にあるさまざまな遊具、例えば、滑り台、平均台、マット、箱積木、攀登棒、ボール、くぐり輪などを、子どもたちが順に回れるように、広く配置しておきます。次に子どもたちを幾つかのグループに分けて一列に並ばせ、遊具別に、反複使用させます。その間ピアノで一定の曲を流し、曲想の変化でグループを交換するようにします。遊具の使用順序をあらかじめ約束しておきますと、スムースに次の遊具へ進むことが出来ます。

なれるにしたがって遊具を変えたり、使用方法を複雑にします。

滑り台をボールを抱えて滑り降り、次の子にボールを投げ上げ、その子はまた、ボールを抱えて滑り降りてくる、というようにしたり、いろいろ工夫してみると面白いでしょう。

⑤二十の扉

これはラジオでおなじみのものですが、子どもたちでも容易に出来るように工夫しました。

はじめは動物や物などを描いた絵を十枚ほど用意しておき、一度子どもたちによく見せます。次にその中から一枚だけ抜いて机に伏せるのです。このとき、抜いた絵も、残りの絵も子どもたちから見えないように注意するのは云うまでもありません。そうしておいて、子どもたちの質問を促し、指名して答えます。「それはしっぽがありますか?」「鳴きますか?」という工合に、子どもたちは大喜びで質問します。

積木やそろばんで二十問を数える役は、どの子にも容易に出来ますし、なれてくると司会も子どもの手で出来ます。

絵の当てっこからはじめて、室内のものとか、お話の中の人物などに進めていくことも出来るようになり、二十問以内に当ってしまうことが多いほど、子どもたちの大好きな遊びの一つになっています。

（函館幼稚園）